

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2025 年(令和7年)
9月5日 第748号

PDF版

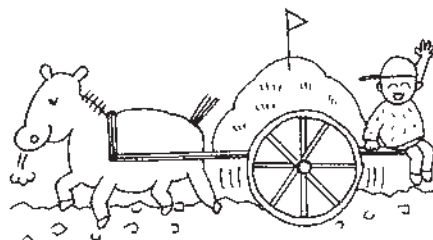
国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2025年4月5日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

高橋 久美子 著

『わたしの農継ぎ』

さとう じゅん子



私は、パン作りが趣味でそこから麦の魅力にハマリ、現在、平日は普通に会社員として働きながら、休日は仲間と共に麦を育てる畑コミュニティ(だいじょうぶだ村)を運営しています。今回は、実家のみかん畑がある田園風景を守るために農業をやりながら、愛媛と東京の2拠点生活を女性がさわれているということで、『わたしの農継ぎ』というタイトルにも惹かれ、直接取り組みを伺いたくて、畑のコミュニティ仲間と4人で埼玉より参加いたしました。

講演の中では、猿による農作物の被害の話があり、情景が浮かぶ臨場感たっぷりの現場のリアルを紹介していただき、学習能力が高い猿の行動がとても怖くて印象に残っています。今後増えるであろう獣害に、どう動物たちと共存していくたら良いのか考えさせられる良い機会になりました。段々畑の石積み(石垣)の話では、石積み直せるのは70〜80代で、間が抜けて40代の高橋さんだということ。どこも手が足りなくなってきた。いるなあと感じました。けれども仲間と石積みを学びに行き実践

されていたり、石積み作業を「リアルテトリス」と表現されていたことがとてもユニークで、一人でもできるように知恵を継承していきたいという意気込みも素敵で、コンクリートではない、自分の手で修復可能な石垣の魅力も知りました。そして、石積み試験や石積み甲子園の存在には、自分の知らない世界にワクワクしました。

その他にもさとうきび畑や黒糖おじちゃんとの出会い、動いた先にあるいろいろな人との出会いや、楽しいことや楽しくないこと、地方の方々との関係。チームでやることの悩みや課題、真面目過ぎない、やれる範囲でやり、失敗したら考えることなどのお話がありました。愛媛の方言のイントネーションがとても心地良く、お話のテンポも良くて、2拠点の大変さもあるとは思いますが、楽しそうで、最後まで話に引き込まれ2時間があっという間でした。雑草やらの手が掛かる時期には、なかなか人に来てもらえない。イベントをすればイベントの時にしか来てもらえないこと。1年を

通しての大変さもありながら、幸福感を持って生きているのが伝わってきました。目の前の困難に感じることもしみ、そして仲間と共に力を付けていく。失敗や悩みの中でも遊び心も忘れずに、そして真剣さも全てが人間らしくて、稼ぐためではなく、自分が食べる分+αの新しい農のかたちは、これからの未来の希望の種だと感じました。私の畑の悩みと同じで共感することばかりでしたが、そうした全ての瞬間を味わっていきいたい。そんな風に思いました。

著者の方から直接話を伺えるのはとても貴重な機会で、他のテーマの回にもまた参加したくなりました。農に留まらず、自分のやりたいことに一歩踏み出せない方へ『わたしの農継ぎ』を通して、高橋さんから沢山のエールが散りばめられているように感じました。講演会で購入させていただいた高橋さんが作った黒糖が、とても美味しかったです。同じテーマに惹かれ合う参加者との一体感と「図書室のつどい」の場の雰囲気は良く、温かい気持ちになりました。

ブッククラブから

有吉佐和子著 『青い壺』 を読んで

川地 玲子 かわち れいこ

数奇な運命で次々と人手に渡った美しい青い壺が出会ったそれぞれの持ち主の人生を描いた本である。再び作家と巡り合うまでの十三話からなる連続短編集となっている。

私はこの作品を全く予備知識なしで読んだのだが、すごい作品だと思った。第二話の定年退職後の夫婦の話から、もう私は共感して膝を打ち、人物描写のうまさに驚嘆し、オチの凄さにおののいた。思わず「ふう。」と一息ついたくらいである。無名の作家が作った美しい青い壺は価値が定着しないまま、譲られ、売られ、盗まれ、遍歴の旅をする。一話一話の持ち主の立場も行動もそれぞれ違う。したがって読者は年代を超えて、「私の一話」みたいなものを見つけることができるのではないだろうか。今回のブッククラブのテーマ「自分と『似ているもの』／『似ていないもの』」にも合っていて、私は話の展開の中で自分と似ているもの、似ていないけど心惹かれるものを見つけないが読んでいった。

ブッククラブでも各自印象に残った話を発表されていて、興味深かった。皆さんも取り上げていらっしやった第四話の遺産相続の話、第五話の白内障の手術の話、第七話・八話のエレガントなディナーの話、第九話の70歳

の女子旅の話などは私も印象に残った。さすが有吉作品、展開のうまさや日本語の美しさが光る。さらに登場人物が皆上品なのである。また、一話ごとのオチが面白い。そして現代社会が失ってしまったものへのノスタルジーを感じる。

講師の佐藤先生によれば、人が地球を変えてしまっている「人新世^{じんしんせい}」に無生物である青い壺が主人公であることは意味があるということだ。また、この作品が書かれた1970年代との時代感覚の差を読むのも意味深い。有吉佐和子の他の作品や信条などとの関連なども色々教えていただき大変勉強になった。

私は特に最後の第十三話のオチに心惹かれた。巡り巡って青い壺は十数年の時を経て古色が付き、古美術鑑定家の命を救い、再び作家の目の前に現れた。だが、古美術鑑定家に名品だと評価されながらも自分の作品だとしても認めてもらえない。そこで、作家はどのような決意をしたか。第十三話と対応している第一話や帰りのタクシーの運転手の話などじっくり読み返した。そこで見えてきたのは、名工と言われる人の矜持であった。すがすがしい感動が広がった。これは偉大な作品は、その存在だけで素晴らしい価値があり、後世に残っていく

というような芸術論にもなっているのではないかと感じたりもしたのだ。

『青い壺』は五十年前に書かれて2011年に復刊し、小説家の原田ひ香さんが「こんな小説を書くのが私の夢です。」という帯の言葉を書いたことで、令和になって奇跡的な復活を果たした作品であるらしい。そして今ベストセラーになっている。この本は、長い低迷の後、目利きによって真価を再認識された青い壺そのものであるような気がするのである。(文春文庫)

くになちブッククラブ

—自分と『似ているもの』／『似ていないもの』—
織田作之助『夫婦善哉』(決定版)
(新潮文庫)

講師 尾崎 名津子
(立教大学・日本近現代文学)

とき 9月11日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込

* 次回は10月9日(木)
村田沙耶香『コンビニ人間』
(文春文庫) です。

* ブッククラブ HP ▶



新着図書から

〈総記〉

生きるための読書

津野海太郎 (新潮社)

019

絵本戦争

堂本かおる (太田出版)

019

読書アンケート

みすず書房編 (みすず書房)

019

〈歴史〉

歴史的に考えること

宇田川幸大 (岩波書店)

201

加藤セチと女性科学者たち

加藤祐輔 (玉川大学出版部)

289

酒を主食とする人々

高野秀行 (本の雑誌社)

294

〈社会科学〉

毎日つかえる子どもの権利

甲斐田万智子 (アルパカ)

316

教養としての「異文化理解」岡田昭人 (日本実業出版社)

361

マイノリティの「つながらない権利」雁屋優 (明石書店)

361

オタク文化とフェミニズム

田中東子 (青土社)

361

歴史に学ぶ生命の尊厳と人権 芝田英昭 (自治体研究社)

364

「働けない」をどこまで考えてみた。栗田隆子 (平凡社)

366

ルポ子どもへの性暴力 朝日新聞取材班 (朝日新聞出版)

367

わたしたちの中絶

石原燃編著 (明石書店)

367

ジェンダー平等のまちをつくる 太田美幸編 (新評論)

367

性的同意は世界を救う 斉藤章佳 (時事通信出版局)

367

老いを読む老いを書く

酒井順子 (講談社)

367

女性から虐待されている男性へ

アン・シルバース (明石書店)

367

日本の女性のキャリア形成と家族 永瀬伸子 (勁草書房)

367

反中絶の極右たち シャン・ノリス (明石書店)

367

わたしはドナーを選んでママになる

ヴァレリー・パウマン (原書房)

367

ノンバイナリー協奏曲 アミア・ミラー (集英社)

367

震災アーカイブを訪ねる 大内悟史 (筑摩書房)

369

ライオンを飼いたい

大久保薫 (中央法規出版)

369

福島の原因と現風景

川崎興太編 (新泉社)

369

桐生市事件

小林美穂子 (地平社)

369

朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち

高麗博物館朝鮮女性史研究会編著 (社会評論社)

369

海外の教育のしくみをのぞいてみよう 園山大祐 (明石書店)

372

ルポ学校がつまらない

小林美希 (岩波書店)

376

つくられる子どもの性差

森口佑介 (光文社)

376

ニッポン学びの花

大田順子監修 (東京創作出版)

379

韓国のみ

清水博之 (韓くに手帖舎)

383

〈自然科学〉

学ぶとは 数学と歴史学の対話

伊原康隆 (ミシマ社)

410

おしゃべりな絶滅動物たち

川端裕人 (岩波書店)

482

僕には鳥の言葉がわかる

鈴木俊貴 (小学館)

488

安楽死の医師

ジーン・マーモレオ (大和書房)

490

対馬の海に沈む

窪田新之助 (集英社)

611

〈芸術〉

いまを愛して生きてゆく

金澤翔子書・金澤泰子文 (PHP 研究所)

728

〈言語〉

日本語教師、外国人に日本語を学ぶ

北村浩子 (小学館)

810

〈文学〉

読めば分かるは当たり前?

犬塚美輪 (筑摩書房)

817

あなただけの物語のために

あさのあつこ (筑摩書房)

901

文芸雑誌『若草』

小平麻衣子 (翰林書房)

910

評伝森崎和江

堀和恵 (藤原書店)

910

恋とか愛とかやさしさなら

一穂ミチ (小学館)

911

二十四五

乗代雄介 (講談社)

911

韓国文学の中心にあるもの 斎藤真理子 (イースト・プレス)

イースト・プレス

923

今年は国立市公民館が
70 周年を迎えます

公民館は 1955 年 11 月に開館し、今年 70 周年を迎えます。今年度は 70 周年を記念して様々な企画を実施しています。10 月と 11 月には 70 周年の節目に「ともに生きること」、そして「ともに学ぶこと」を考える連続記念イベント開催します。イベントの詳細は公民館だより 9 月号をご覧ください。

講座参考図書

- * 争いばかりの人間たちへ 山極寿一 (毎日新聞出版)
- * 老いの思考法 山極寿一 (文藝春秋)
- * 日本精神史 近代篇上・下 長谷川宏 (講談社)
- * 幸福とは何かーソクラテスからアラン、ラッセルまで (中央公論新社) 長谷川宏 (作品社)
- * くにたち公民館 60 周年記念誌ーともに歩んで 60 年ー深まる学び、ひろがる明日 60 周年記念事業実行委員会記念誌部会編 (国立市公民館)
- * 雑誌・月刊社会教育 No. 827 2025 年 4 月号 (特集 公民館入門ー国立市公民館に学ぶ) (旬報社)

図書室のついで

まんぷくモンゴル！

ー公邸料理人、大草原で肉を食うー

お話 鈴木 裕子^{ゆうこ} (料理人)

保育園の調理室勤務から一転、子育てが一段落し、両親も元気な今と思いい立ち、単身モンゴルに渡った鈴木さん。

大草原の国モンゴルでは、家畜と共に暮らし、生きていくために命はいただくけれども、お互いに「生きもの同士」といった意識が人々にあることや、厳しい自然の中では自然に合わせるのとは人であるという意識があるためか、人同士も違いをおおらかに受け入れ、言葉がわからない者同士でも自然とやりとりが成立していることなど、鈴木さんはこれまで知り得なかった様々なことを体感されています。

現在もモンゴルで多くの時間を過ごしている鈴木さんに、日本とモンゴルの違いやそれぞれの良さ、異文化の中での暮らしや感じてきたことなどについてお話を伺います。

〈鈴木さんの本〉 表題作 (産業編集センター)、ウェブマガジン『旅ブックス MAGAZINE』にて「ぐつくりモンゴル！草原の秘密」を連載中

とき 9月27日(土) 朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 9月9日(火) 朝9時〜

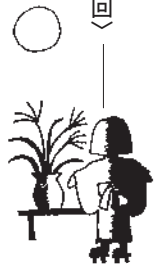
電話または申込フォームより
公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第6回〉

若松英輔 著

『本を読めなくなった人 のための読書論』



田久保 薫子

待ち遠しかった秋の到来です。今夏の暑さは例年以上に厳しかったからこそ、気持ちだけでも「秋」を先取りしたくなります。秋と言えば「読書の秋」ではないでしょうか。半年に亘り様々な本を紹介しましたが最後に「本を読む」ということについて考えてみたいと思います。

若松英輔さんの『本を読めなくなった人のための読書論』と出会うまで「本を読む、それは一冊でも多く、そして内容をきちんと理解することが大切」だと考えていました。一方、こうした思いが強くなるほど本から手が遠のいてしまう。そんなものがきを感じた時、著者の言葉は優しく寄り添います。

批評家、随筆家として活躍する若松さんは「本が読めなくなったのは、内なる自分からのサイン。だから、読めないときは、無理をして読まなくていい。読めない本にも意味があるから、積読でもいい。知識を増やすためではなく、人生を深いところで導き、励ます言葉と出会うためにする読書」と説きます。

本書ではこうした読書のためのさまざまな方法が紹介されています。例えば「正しい」読み方など存在しないの考え方です。過去の学習経験から

「正しく」読まなくてはならないと思いつまされてきた私たち。「何を『正しい』とするかはじつにあいまいであり、無数のさまざまな読書があるだけ。また誰もが自分の読み方が正しくないのではないかという不安を抱えながら本を読んでいる」と若松さん。不安を忘れることから始め、「情報」を入手することで終わる読書ではなく、一つ一つの言葉に意味を感じることが出来る「経験」としての読書が提案されています。

さらには「本は全部読まなくてよい」「図書館へ行く。司書に読書をめぐって相談してみる」「むやみに本を探さない。静かに出会いを『待つ』といったことも紹介されています。「本が読めなからこの本を読むことも難しい」と感じた場合は各章の終わりにある「実践のためのポイント」をまとめた頁に目を通すだけで本書の骨子が理解できる点も嬉しいのです。

読書が情報収集や他者との比較のためではなく「人生の深みへと導くもの」となった時、本は「生きる何ものか」になってくれるとのアドバイスに、改めて本との向き合い方を教えてもらった気がします。

残暑が厳しい季節ではありますが、これから巡り来る日々の中で新たな本との出会いを心待ちにしつつ6回の連載を終えたいと思います。ありがとうございました。

(亜紀書房)

係から

今月で田久保さんの「私の本棚」は最終回です。それぞれの月に合わせて、とっておきの本を丁寧に紹介いただきました。誠にありがとうございました。

